

日本台湾学会 第 27 回学術大会 公開シンポジウム

これを語らずして台湾を語るなかれ

——地域からの台湾研究

日本台湾学会は 1998 年に成立し、専門領域の異なる数多くの台湾研究者がここに集い、今日の台湾研究の隆盛を築いてきた。一方で、研究が深化・多様化するとともに、なぜ台湾を研究対象とするのかという問いは、かつてほど投げかけられることがなくなった。

学術大会の発表はパネルも自由論題も領域ごとに行われている。しかし台湾研究の醍醐味は、領域を超えて対話が交わされる点にあったように思われる。今回のシンポでは、研究が領域化・細分化される中で、自らの研究を台湾研究全体の中に位置づけ、各自の視点からいかにして台湾の本質に迫っているかを語っていただく。その際に、台湾の中心から離れた地域から語るという視点を組み込み、台湾の片隅を語ることを意味を問いたい。

自分の研究対象とする課題や地域こそ台湾研究の縮図だという信念にもとづいた報告に耳を傾け、自らの研究を問い直し、「台湾」という大きな主語をもう一度語り直す、台湾研究の醍醐味を味わえるシンポとしたい。

日時：2025 年 5 月 24 日（土）13:00-17:00

会場：関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス（本部キャンパス） G 号館 3 階 301 教室
（会場については別紙 5. および 6. を参照）

方式：ハイフレックス（対面 + Cisco Webex オンライン会議）
（詳細については別紙 7. を参照）

使用言語：日本語

備考：会員以外の方も参加登録をすれば無料にてご参加いただけます。Peatix にて参加登録
をお願いします

主催：日本台湾学会

共催：関西学院大学

助成：公益財団法人日本台湾交流協会

スケジュール：

- 12:30 開場
- 13:00～13:05 企画説明：大東和重、司会挨拶：植野弘子
- 13:05～13:25 第1報告：山崎直也（帝京大学）
「カワウソとクロクマ——金門島の視点から台湾研究を再考する」
- 13:25～13:45 第2報告：横田祥子（滋賀県立大学）
「台湾中部の田舎町で「国際結婚」を見つめて考えたこと」
- 13:45～14:05 第3報告：呂美親（国立台湾師範大学）
「地方文学史における台湾語文学の発展とその役割
——『台湾府城教会報』から『蕃薯詩刊』まで」
- 14:05～14:15 休憩
- 14:15～14:35 第4報告：倉本知明（文藻外語大学）
「異郷を選び取る——南台湾におけるマージナルな死者との共存を通じて」
- 14:35～14:55 第5報告：西村一之（日本女子大学）
「東海岸の港町から照らし出される台湾社会」
- 14:55～15:15 第6報告：川上桃子（神奈川大学）
「シリコンバレー——ハイテク産業の『両湾』関係史」
- 15:15～15:35 第7報告：田本はる菜（成城大学）
「中部山地の集落から考える周縁性と多様性」
- 15:35～15:45 休憩
- 15:45～17:00 フロアとの質疑

各登壇者・題目・概要：

登壇者：山崎直也（帝京大学）

「カワウソとクロクマ——金門島の視点から台湾研究を再考する」

報告者が金門島を初めて訪れたのは2019年のことで、台湾研究の世界に身を投じてから既に20年が過ぎていた。台北の松山空港から飛行機で1時間足らずのこの島は、多くの台湾研究者にとって、意外に近くて遠い存在なのではないだろうか。台湾島、澎湖諸島、馬祖列島とともに「台湾」を構成しながら、「四百年の台湾史」という言説に回収され得ないこの島では、台湾研究者が思い描く「標準的な」台湾像を揺るがす現実に直面することがしばしばある。本報告では、報告者が金門島で感じた当惑を紹介しながら、台湾研究者がこの島に目を向けるべき理由を考えていきたい。

登壇者：横田祥子（滋賀県立大学）**「台湾中部の田舎町で「国際結婚」を見つめて考えたこと」**

私の調査地は、客家人が多く住む中部の地方都市である。この都市は、921 大地震の被災地でもあり、「社区营造」の努力が積み重ねられてきたが、人口減少が著しい。台湾ナショナリズムに商業的な「国際結婚」配偶者はどのように包摂されるのか、私はそんな関心から「国際結婚」研究を始めた。しかし、「国際結婚」の調査によって、結婚や家族の生々しい現実に直面させられた。さらに、ジェンダー主流化の陰に隠された、台湾社会の「人種」「階級」の矛盾が明るみになった。また当初「国際結婚」というテーマは、正統的な研究テーマとはみなされなかった。発表者は、身の置き所のなさを抱えつつ、研究の方向性を模索した。本発表では、「国際結婚」についての調査・研究において、自身がどのようにテーマとポジショナリティを見出していったのかについて報告する。また、調査地の近況も紹介したい。

登壇者：呂美親（国立台湾師範大学）**「地方文学史における台湾語文学の発展とその役割——『台湾府城教会報』から『蕃薯詩刊』まで」**

2023 年に刊行された『台南文学史』で報告者は第 4 巻『台語文学』の執筆を担当した。台湾語文学の出発点は、トーマス・バークレーが台南で 1885 年に創刊した『Tâi-oân-hú-siáⁿ Kàu-hōe-pò』(台湾府城教会報) にまで遡る。以降、蔡培火による「白話字」普及の努力や、頼仁聲が 1925 年に刊行した小説『An-niá ê Bak-sái (母の涙)』、鄭溪泮が 1926 年に刊行した『Chhut Sí-sòaⁿ (死線を越えて)』、さらに戦後の王育徳による台湾語の研究推進を経て、鄭兎玉、林宗源、胡民祥らの重要な詩人が活躍した。1991 年に創刊された台湾初の全編台湾語による詩雑誌『蕃薯詩刊』では、新たな「台湾文学」の創出が目指された。本報告ではこれら台南が発足した台湾語文学の発展をたどりつつ、台湾語という視角から見える台南・台湾を論じたい。

登壇者：倉本知明（文藻外語大学）**「異郷を選び取る——南台湾におけるマージナルな死者との共存を通じて」**

異郷で暮らすことは、ときに生きている人間との付き合い以上に、死者との向き合い方が重要になる。とりわけ、それまで異郷と見なしてきた土地を自らの「故郷」として再認識する際、死者の声に耳を澄ませることはその土地に根を下ろす上で欠かせない作業となる。眷村文学を台湾研究の入り口としたわたしにとって、外省人の二世作家たちが描いた「故郷」への葛藤は、台湾の複雑性を理解する上でひとつの指標となってきたが、わたし自身が台湾という異郷に自らの居場所を見出そうと葛藤する中でいつしかそれは自身の現在、あるいは未来へと変わっていった。家族や親しい者たちの死を台湾において経験していないわたしは、祀る者のいない墓や有応公祠などマージナルな死者たちに注目することで、近くて遠い異郷を自らの一部として受け入れていったが、本報告では彼らと「ご近所付き合い」をす

るなかで発見した南台湾各地の異なる文化や信仰の共存状態などについても共有したい。

登壇者：西村一之（日本女子大学）

「東海岸の港町から照らし出される台湾社会」

発表者は1990年代初めから東海岸にある港町をフィールドとし、現在まで繰り返し訪れ臨地調査を行っている。この間、この地の人びととの付き合いそして見聞きする出来事を通して台湾社会に対する思索を重ねている。特に漁業をめぐる社会関係の調査を継続する中で、日本植民統治、民族集団間関係、中台関係、外国人労働者の増加、観光化という台湾社会を見通す上でカギとなる現象について考えている。発表では、港町から見える台湾社会の姿を紹介していきたい。

登壇者：川上桃子（神奈川大学）

「シリコンバレー——ハイテク産業の『両湾』関係史」

北カリフォルニアのシリコンバレーには、1960年代から90年代にかけて留学生として渡米し、卒業後も現地にとどまってハイテク産業のエンジニアとなった台湾出身者たちのコミュニティがある。このハイテクコミュニティは、1990年代以降の台湾半導体産業の発展に多大な貢献をしたことで知られる。筆者はこの10年ほど、台湾のハイテク産業の研究と並行して、このコミュニティの定点観測を行ってきた。この報告では、台湾のハイテク産業史と表裏一体の関係にあるシリコンバレーの台湾人ハイテク移民コミュニティの歴史を概観する。「台湾人のシリコンバレー経験」というレンズを通して、台湾人ハイテクコミュニティの越境性と、米国が台湾に与え続けてきた影響、そしてシリコンバレーで暮らす台湾出身者たちのアイデンティティについて考える。

登壇者：田本はる菜（成城大学）

「中部山地の集落から考える周縁性と多様性」

報告者は2009年に初めて長期調査のために台湾中部の「山地」を訪れた。縁あって、2008年に正名をはたした原住民族セデックの人々が大半を占める集落に通い始めた。予想に反し報告者の心をとらえたのは、権利回復や伝統文化復興に向かって一丸となる人々の姿とはまた別のものだった。むしろ新鮮だったのは、世代、経歴、ジェンダーといったコミュニティの内包する多様さや複雑さが日々の出来事を通して浮かび上がることだった。こうした「山地」のあり方に注目することで、こんにち台湾社会にも浸透している周縁性や多様性のイメージをどう問い直すことができるのか考えてみたい。